

資料 2

## 第12回選定のグランプリ及び優秀賞（案）

---

# 第12回選定のグランプリ及び優秀賞（案）

グランプリ

いっぽんしゃだんほうじん

一般社団法人Local Revolution

ビジネス・イノベーション部門

ほっかいどうはこだてし

(北海道函館市)

・近年の海水温上昇とともにマイワシが北上し、函館近郊でマイワシの大量死が確認され、死骸の焼却炉への移動、焼却コスト、漁船への二次被害など、フードロスだけでなく環境被害や漁業被害に陥っている。また、マイワシの水揚げ量が急増する一方で、イカが獲れないとため水産業が疲弊している。マイワシの漁獲量は9年で60倍となっているが、雑魚として扱われ肥料や廃棄物などの未利用低利用魚となっている現状に着目した。



・マイワシの価値を高めるプロジェクトとして、令和3年12月より「ハコダテアンチョビプロジェクト」を始動。アンチョビ商品開発に伴い令和5年8月に法人設立。



・今までリリースしていたマイワシを漁師から仕入れ、地元の水産加工会社が利益を得られるよう加工し、地域の就労支援施設にて瓶詰とラベル貼りを行い、地域の小売店や飲食店で新しい地産地消商品として販売するなど共存共栄を図る。商品開発では、海道工業技術センターとの共同開発や函館市や北海道との協業など官民一体で取り組んでおり、商品販売に関しては、関わる全ての人が利益を配分できる仕組みを作っている。



・プロジェクト始動から地元新聞社などのメディアに随時取り上げられるなど他30件以上のテレビ、ラジオ、Webなど様々な媒体で取組を発信している。商品PRよりも、地域の課題解決に向けた取組そのものを取り上げてもらい、応援者・賛同者が年々増加、商品の購入はリピーターが非常に多く、地産地消へ貢献している。

## 【有識者懇談会委員のコメント】

- ・社会経済的・環境的課題に直面する漁業にとって、資源循環と付加価値創出を両立する持続可能なモデルとして重要であり、今後の販路拡大や他地域への展開、新たな食文化の創出が期待できる。
- ・地域資源を活かした活動を通じて、住民や外部人材との交流を促進し、持続可能な地域づくりに貢献している点が評価できる。
- ・海水温上昇に伴うマイワシ豊漁に対する柔軟性、対応力が素晴らしい。

優秀賞

かぶしきかいしゃ

株式会社ウミゴー

ビジネス・イノベーション部門

しづおかけんにしいずちょう

(静岡県西伊豆町)

・日本初の漁港の釣り場予約サービス「海釣りGO」を通じ、漁港の釣り場開放と適正管理をすることで、釣り人・漁業者・地域社会の共存する仕組みを実現した。全国各地で見られる、釣り人と漁業者のトラブルは、漁港の管理コストが漁協へのしかかり、釣り人にはその対価を支払う仕組みがないためであり、この課題を見つめなおし、ウミゴーは立ち上がった。2025年からはアプリ「UMIGO」を通して釣り以外にもさまざまな海業サービスを提供している。



・釣り場や駐車場の予約・決済システムを構築し、釣り人が負担する利用料の収益を漁港設備の改良や美化活動、巡視員の雇用へ活用している。これにより、漁港本来の機能を損なわずに安全な釣り場の提供や地域の雇用創出につながっている。釣り人に対して閉鎖された漁港が再開する他、このシステムが他県の漁港や港湾でも活用されている。

## 【有識者懇談会委員のコメント】

- ・漁業者と釣り人の共存していく仕組み、デジタル技術活用により永続可能なスキームを構築。
- ・収益を地域に還元することで漁業者と釣り人の共存と持続可能な漁村づくりを実現している点を評価。
- ・漁港管理にICTを導入し、アプリによる予約・決済で釣り人も利用料を負担し、漁港や資源維持に貢献できる仕組みを構築した点は、地域のスマート化を体現する先駆的事例。

# 第12回選定のグランプリ及び優秀賞（案）

優秀賞

だいせんにゅうぎょうのうぎょうきょうどうくみあい

大山乳業農業協同組合

ビジネス・イノベーション部門

とつりけんこうらちょう

(鳥取県琴浦町)

・酪農現場では堆肥の水分調整剤として使われる「おが粉」の調達困難や価格高騰が深刻化している一方、下水汚泥の焼却処理の過程で発生するバイオ炭の活用法が模索されていた。これらの課題を受け、企業間連携により、バイオ炭をおが粉の代替材として利用する取組を開始した。行動指針の1つに環境に配慮した酪農生産を掲げて地域貢献を図っており、未利用のバイオ炭を酪農に活用することで環境保全に寄与し、持続可能な酪農の実現を目指している。



・バイオ炭混合堆肥により、資材コストの削減だけでなく、土壤の浸透性・保水性の向上や匂い軽減、pH調整などの効果も確認された。牛の飼料用作物の健全な生育や収量の安定化など農業生産性の向上につながっている。また、バイオ炭は長期間にわたりCO<sub>2</sub>の排出を抑制する。年間100t超のCO<sub>2</sub>削減が見込まれ、将来的にはJクレジット販売による利益還元で酪農家を後押しする。



## 【有識者懇談会委員のコメント】

- ・バイオ炭活用で畜産の課題を解決できている、官民共創の好例。
- ・企業や研究機関とも連携し、カーボンオフセットとエネルギー効率化を果たしながら、新しい酪農の姿を提示。
- ・資材コストの削減や土壤改良効果といった農業経営上の利点に加え、年間153 t の炭素を土壤に貯留するという明確な成果をあげている点で高く評価できる。

優秀賞

あましんこうきょううきかい

海女振興協議会

コミュニティ・地産地消部門

みえけんとばし しまし  
(三重県鳥羽市・志摩市)

・鳥羽志摩地域において、海女漁業は古くから受け継がれてきた伝統的な漁法であり、海女の数は全国一であり、海女文化が地域の誇りとなっている。しかし、資源の現象、後継者不足や高齢化などの問題が深刻化している。この状況から、海女漁業および海女文化を貴重な地域資源と位置づけ、海女漁業の振興と海女文化の保存・継承、さらに観光資源として活用を目指している。

・平成21年より全国海女サミットを開催し、全国の海女が一堂に会し、資源や漁場の変化、高齢化などの諸問題について情報交換を行い、地域を超えた海女同士のつながりを深めている。また、海女が漁獲した海藻などを加工した水産加工品を「海女もん」としてブランド化し、所得向上を目指している。



## 【有識者懇談会委員のコメント】

- ・全国海女サミットや研修会、ブランド化事業を通じて海女漁業と文化の保存継承を進め、地域の誇りとして国内外に価値を高めている。
- ・本事例の核心的価値は、女性漁業者が単なる労働力ではなく、資源管理・文化継承・地域社会形成・国際関係構築の複合的領域において主体的役割を担っている点にある。
- ・長年にわたり、イベントや活動を活性化し、人材も育成されている。

# 第12回選定のグランプリ及び優秀賞（案）

優秀賞

そのぎ  
かせんだん  
**彼杵おもしろ河川団**

コミュニティ・地産地消部門

ながさきけんひがしそのぎちょう  
(長崎県東彼杵町)

・「彼杵海水浴場を復活する会」の海岸清掃から始まり、自然の森、川、海の変化に対応して、アユ遡上改善の魚道設置やドジョウ養殖などの川の整備へ展開し、その後、間伐材や不要材を資源として活用する山林保全と資源循環の実践と仕組みづくりに着手する等「彼杵おもしろ河川団」へ変化した。活動では、行政や企業、大学、小学校や幼稚園等、多様な関係者と連携し行っている。



・魚道の改築が決定し、長崎県や工事業者と改築方針や方法について協議を進めている。海から川、川から山へと徐々に整備活動を拡大し、森と川と海の全体の取組へ発展し今後の活動モデルとなると期待できる。間伐材や薪販売では、東彼杵町からの協力を受け事業拡大し、地域で4名の雇用を創出した。また、新たな森林・竹林整備の団体設立には、河川団が持つノウハウを提供する等のサポートを行っており、持続可能な取組及び雇用を生み出している。

## 【有識者懇談会委員のコメント】

- ・海・山・川がトリプルネットワークを組んでの流域治水は好モデルケースとして各地に紹介したいもの。
- ・海の環境を守るには流域全体の健全性が不可欠であることを示し、鮎の遡上改善やドジョウ養殖、環境教育を通じて生態系保全と地域文化の醸成を結びつけている点は高く評価できる。
- ・海岸清掃からはじまった取組が、川、森林整備やそれに取り組む次世代人材への継承など、関係人口の創出とともに大きく長期的な取組となっている。

個人部門

優秀賞

ふかさく かつみ  
**深作 勝己**

いばらきけんほこたし  
(茨城県鉾田市)

・6代100年以上続く農家で、自家製堆肥を使った循環型農法を実施している。「新鮮なメロンを買いたい」「いちご狩りがしたい」という消費者の声に応え、直売所、日本初の時間無制限食べ放題を開始、「深作農園の果物を使ったスイーツが食べたい」という要望により6次産業化を推進し、カフェ&スイーツ工房を整備した。農園型テーマパークに至り、地域とともに発展する持続可能な農業の実現を目指している。



・6次産業化の売り上げは、令和元年から130%の伸びを達成し、いちご狩りの年間来園者数は3万人以上に伸び、鉾田市の人気観光スポットになった。雇用は、地元の学校だけでなく全国の大学からも応募があり、85%の従業員が女性で加工や企画・販売等で活躍している。産後の職場復帰、正社員登用制度等働く環境整備を進め、性別、国籍、年齢問わず適材適所で人が輝ける多様性のある職場を実現している。また、就農・加工希望者への勉強会開催や、大学での講義等を行いつつ、自身も再び大学で学び始めるなど農業の未来と地域の活性化のため努力している。



## 【有識者懇談会委員のコメント】

- ・食の可能性に挑みながら情報発信やコミュニケーション、教育普及に力を入れ、自身も周囲も成長軌道に乗せるべく活動を継続発展させている。
- ・農家の6次産業化は決してめずらしくはないが、その商品の品質がとても高い。消費者のリクエストを具現化していく大きな評価。
- ・継続性と実績が抜群。女性の進出、若年層の啓蒙にも寄与している。